

工芸技術記録映画

# 型染め

カラー 30分

## 江戸小紋と長板申形



企画 文化庁製作 英映画社

江戸小紋：小宮 康孝 長板中形：清水幸太郎

道具彫：篠原 雄次 突彫：増井 一平 藍染：山ノ井武之

——製作意図——

生地に型紙を置いて模様を染める型染めは、伝統的な染色技術である。この映画は、一般に人間国宝とよばれる重要無形文化財(江戸小紋)の保持者、小宮康孝氏と、同じく(長板中形)の保持者、清水幸太郎氏の、それぞれの製作過程を丹念に記録したもので、型染めの技術保存に役立て、広く染織工芸の魅力を伝えようとするものである。



——かいせつ——

(江戸小紋)

小紋は江戸時代、武士の礼装などに用いられていたが、町人の経済力の向上とともに、庶民の着物などにも使われるようになった。

小宮康孝氏(1925-)は江戸時代の型紙をもとに新しい意匠を考える。構想がまとまると伊勢の白子へ新しい型紙を注文する。昔からこの町には優れた型彫り師が集っていた。

群青色に着色した型染め用の糊(防染用)がつくられる。長い張り板に絹の生地が張られ、型紙の上から適度な粘りを持った糊が丁寧に塗られてゆく。糊の付着したところは染め上がると白く残ることになる。型付けは、目印のホシを合わせながら次々と後へ送られてゆく。

色糊を調合したのち、型付けされた生地の上を、大きな箆で縦方向にしごいて地色を染め上げる。

発色のために蒸された生地を水洗いすると、ふっくらとした優美な江戸小紋の反物が出来上がる。一見無地に見える小紋染めは、よく見ると洗練された意匠が凝らされていて趣き深い。

(長板中形)

藍一色に染められた浴衣は、江戸時代から庶民の着物として日本人の生活に溶けこみ、特に夏の風物詩に欠かせない。

清水幸太郎氏(1897-)は今でも長板中形を染め続けている。この長板中形は木綿を用いる。生地を表と裏に型付けをするので、仕事をしやすいように緋粉で赤く着色された糊を用いる。

複雑な図柄は二枚の型紙で型付けされるがこれを二枚型、あるいは追掛型という。

紺屋に渡された反物が藍染に浸けられる。

水洗いされて干し場にひるがえる長板中形の白と藍の描き出す粋な柄模様が清々しい。江戸小紋や長板中形のような型染めには、江戸時代から続く日本人の洗練された美意識と心意気が伝えられていて今でも人びとに好まれている。

製作スタッフ 製作：服部悌三郎・宮下英一 脚本・演出：山添 哲 撮影：金山富男・小林 治  
照明：前田基男 音楽：一柳 慧 録音：加藤一郎 効果：小森護雄  
解説：和田 篤 ネガ編集：長谷川宣人 製作担当：内海穂高 現像：東洋現像所  
取材協力 日本浮世絵博物館・ポラ文化研究所

記録映画・PR映画・教育映画・企画製作



株式会社

英映画社

〒104 東京都中央区八重洲2-6-13 幸田ビル 電話 東京 (281)3414, 3415, 4680